

「顰面」の天下人 駿府と浜松の地政学

井上 亘（常葉大学）

要旨：徳川家康が「慢心の自戒として生涯座右を離さなかった」と伝える「三方ヶ原戦役画像」（顰像）が三方ヶ原の敗戦と無関係であることが明らかにされた。ではこの絵は一体なにを描いたものなのか？この謎を家康晩年の「天下普請」にかけた思いから紐解くとともに、静岡と浜松のあいだで繰り返されてきた「家康公争奪戦」についても駿府城と浜松城に関する文献および考古学的な知見をもとに一定の決着をつける。

キーワード：徳川家康三方ヶ原戦役画像 顰像 天下普請（御手伝普請）

はじめに：「顰像」とはなにか

本稿は2023年度「静岡市清水区生涯学習交流館×常葉大学共催公開講座」として7月14日に興津生涯学習交流館で行われた「ディスカバー静岡 徳川家康」第1回で話した同題の講演内容を公表するものである。文章化にあたり適宜、修訂と増補を加えた。

本稿のタイトル「顰（しかみ）面」の天下人とは徳川美術館所蔵の有名な「顰像」の絵に基づくが、この作品については最近、意外な新説が提起されて話題になった⁽¹⁾。

この絵は周知のとおり「徳川家康三方ヶ原戦役画像」と呼ばれ（図1）、

家康の経験した負け戦とは31歳に当たる元亀3年（1572）12月、三方ヶ原で起こった武田信玄との合戦である。家康は後年、この敗戦を肝に銘ずるためにその姿を描かせ、慢心の自戒として生涯座右を離さなかったと伝えられる。威厳のある堂々とした権現像とは異なり、憔悴し切った家康の表情が巧みに描かれており、別名「顰（しかみ）像」とも呼ばれている。⁽²⁾



図1「顰像」徳川美術館 1995

というように、家康の人柄をよく伝える作品として紹介されてきた。

ところがこの絵の由来を調べてみると、1780年に紀伊徳川家から尾張家に嫁いできた従姫の持参品（嫁入り道具）で、彼女の没後1805年に家康ゆかりの品を保管する長持に収められたという（原2016）。これが明治の末に、尾張家初代義直が狩野探幽に命じて「自ら戒め子孫をも戒めん為に、わざと（三方ヶ原の）敗余の容貌」を描かせたという話になった（西村1910, p.148）。これはもとより「顰像」が尾張家に伝えられたことを前提と

(1) 中日新聞 2022年1月1日 (<https://www.chunichi.co.jp/article/395379>；2024年9月1日閲覧、以下同)「しかみ像、三方ヶ原の戦いと関連ない？」による。新説の出典は原2016。

(2) 文化遺産オンライン：<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/18704>。一部表記を改めた。

する虚説であるが、それが 1936 年の徳川美術館開設をきっかけに広まったのだという。では三方ヶ原の戦いと縁が切れたこの絵は一体なにを描いたものなのか？

その菩薩の半跏思惟像にも似た構図から他の権現像などと同様「神格化」を目的として描かれたといわれ、「武神として礼拝向けに描かれたと見なす方が合理的」とされているが（注 1）、本稿は絵の別名「顰像」の方面からこの謎に挑む⁽³⁾。差しあたりタイトルの「顰面」を「しかみつら（しかめつつら）」とよむか「しかみめん」とよむかが鍵となる。

1. 家康の遺言と天下普請：岡崎・江戸と名古屋

徳川家康（1542-1616）は 6 歳で生まれ故郷の**岡崎**を離れて織田方の人質となり⁽⁴⁾、8 歳からは今川の人質として**駿府**で過ごした（1549 年）。桶狭間で今川義元が死ぬと、19 歳の家康はようやく**岡崎**に帰って城主となり（1560 年）、その 10 年後に**浜松**に拠点を移した（1570 年）。信長の死後、秀吉に臣従した 45 歳の家康は再び**駿府**に戻り（1586 年）、小田原攻めにより秀吉が天下統一を果たすと家康は**江戸**へ転封された（1590 年）。やがて秀吉が死に、「天下分け目」の関ヶ原の戦いをへて江戸に幕府を開いた家康は 64 歳となる年わずか 2 年で將軍職を子の秀忠に譲り、「大御所」として**駿府**に帰った（1607 年）。その後、大坂の陣で豊臣氏の滅亡を見届けた翌年に 75 歳の生涯を閉じた。

このような経緯から地域振興の現場では岡崎・浜松・駿府のあいだで「家康公争奪戦」が展開して久しいが（江戸＝東京ではあまり人気がない）、家康本人の遺言によれば、

「臨終候ハ、御躰をハ久能へ納、御葬禮をハ増上寺ニて申付、御位牌をハ三川之大樹寺ニ立、一周忌も過候て以後、日光山に小キ堂をたて、勸請し候へ。」八州之鎮守に可被爲成との御意候。皆々涙をなかし申候。（『本光国師日記』元和 2 年 4 月 3 日条）

「臨終候はば御体をば久能へ納め、御葬礼をば増上寺にて申し付け、御位牌をば三河の大樹寺に立て、一周忌も過ぎ候ひて以後、日光山に小き堂をたて、勸請し候へ。」八州の鎮守に成らせらるべしとの御意に候ふ。皆々涙をながし申し候ふ。

というように、墓は静岡（久能山）、葬式は江戸（増上寺）、位牌は岡崎（大樹寺）に置き、一周忌のあと日光に小さな堂を建てて勸請せよと言っている⁽⁵⁾。臨終の際に思いを致した場所は 4 箇所、日光を江戸に含めてよければ 3 箇所となつて、浜松は漏れている。

岡崎城は享徳年間（1452-55）に三河国守護代の西郷頼嗣が竜頭山に築いた砦に始まり、家康の祖父松平清康が 1531 年に入城して整備された（岡崎市 2019）。家康は 1542 年その二丸で誕生したといい、60 年に城主となって一向一揆の鎮圧に苦しみつつ（笠原 1970）、三河を統一して隣国遠江へ侵攻し、

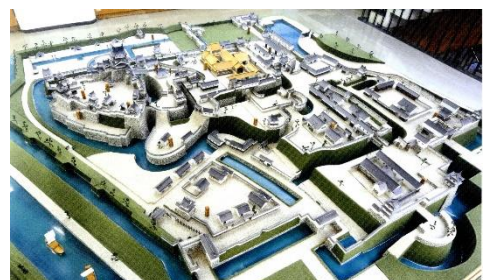


図 2 岡崎城模型（岡崎市 2019）

(3) この別名は「いつ誰によって命名されたのか不明である」（原 2016,p.1）。

(4) 従来、今川の人質として駿府へ向かう途中に拉致されて尾張に送られたといわれてきたが、最近の研究で家康の父広忠が織田方に降伏して人質となった経緯が明らかにされた（本多 2022,pp.6-7）。尾張では織田家の菩提寺である**万松寺**に預けられたという（『徳川実紀』；<http://www.banshoji.or.jp>）。

(5) 家康の遺体が久能山にあるか日光にあるかも「争奪戦」になっているが、家康の遺志としては遺体を久能山に納め、日光には「勸請（かんじょう）」つまり霊のみを移して祭ることを求めたのである。

70 年に本拠を浜松に移すと、嫡子信康をその城主とした。ところが 79 年 8 月に信康は岡崎城を追放され、翌月二俣城で自刃する⁽⁶⁾。城代となった重臣石川数正が 85 年 11 月に離反して関白秀吉の下に走り、秀吉が「家康成敗」を決意すると（本多 2022, pp.152-4）、岡崎城は対秀吉の拠点として普請（改修）が進められたが⁽⁷⁾、同月末に天正大地震が畿内から濃尾・北陸にかけて甚大な被害をもたらしたため（磯田 2014, pp.10-5）、家康は翌年に秀吉と和解して臣従する。岡崎城代は本多重次が引き継いだ、家康が 90 年に江戸転封となると、秀吉の部将田中吉政が入って天守を建て、東海道を城下に引き込む形で城下町を拡張したが、関ヶ原のあと城主となった本多康重は矢作橋の架設などとともに、城内に引き込んだ東海道から城郭を守る措置をとった（岡崎市 2019, p.7）。この一連の修築過程は下文の「天下普請」と関連して注意されるが、ともあれ家康は浜松に移ったあと、城主として岡崎に戻ることはなかった。

江戸城は桓武平氏の流れを汲む中世江戸氏の居館にさかのぼり、この江戸館の台地上に扇谷上杉氏の家宰であった太田道灌が 1457 年に江戸城を築いた⁽⁸⁾。1590 年、八朔の吉日に入城した家康は直ちに家臣の知行割りを進めて本丸・西丸の工事に着手するとともに、江戸湾に注ぐ平川から城下へ「道三堀」を引いて物資の輸送路を確保し、この堀に沿って町がつけられた。この掘割りと築城工事で出た土を低地に盛って街区を造成し、城下まで入り込んでいた日比谷入江を埋め立てた（図 3）。こうした「下町」に水を供給するために井の頭から「神田上水」を引き、また諸国から集まった商人らの願いのままに屋敷地を割り与えて付近の開発を任せ、かれらを「草分名主」としてやがて〈名主一町年寄一町奉行〉からなる市政組織を立ち上げた。家康の城と町づくりの手法がよくわかる。

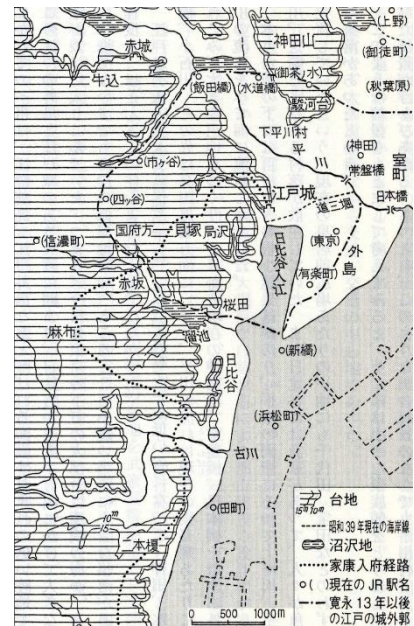


図 3 家康入国前後の江戸

そして 1603 年 3 月、家康が征夷大將軍の宣下をうけて幕府を開いた翌月から天下普請（御手伝普請）が始まる⁽⁹⁾。まず今の駿河台を掘り崩して「外島」の湾岸を埋め立て市街地を拡張した。「日本橋」の架橋もこの時であったが、この工事には 70 家の大名を 13 組に分け「千石夫」千石に 1 人の割合で 3 万もの人夫が動員された。その翌年には江戸城の普請が始まり、29 の大名家らに 3 千艘の石船を用意させて伊豆半島各地から石材を切り出し江戸に運ばせた⁽¹⁰⁾。1606 年 3 月からは藤堂高虎の「縄張り」総設計指揮のもと

(6) この信康自刃と母築山殿の殺害については本多 2022 第 4 章参照。なお二俣城は 2018 年に国史跡に指定されている（浜松市 2017 参照）。

(7) 『家忠日記』天正 13 年 11 月条、盛本 2022, pp.83-5；岡崎市 2019, p.5 参照。

(8) 以下、村井 2008, 1~3 による（図 3・表 1 も同じ）。また内藤 2013 参照。

(9) 「普請」はフシンと唐音に読む禅語由来の工事分担を意味する語だが、「請」は「こふ（乞）」とも「うく（受）」とも訓み、日本語の授受表現を象徴する難語でもある。室町幕府の「普請奉行」が早い例だが、家臣に工事を分担させる手法は内裏再建などの受領請負に由来し、中世権門の動員法といえる。

(10) 10 万石で百人持の石 1200 を供出したという（村井 2008, 4；本多 2010, pp.210-2）。各地に石丁

家康は後水尾天皇の即位にあわせて上洛し、二条城で秀吉の遺児秀頼と会見した（『当代記』巻6；本多2010, pp.236-9）。ここで家康は秀頼の臣従を確認するとともに西国の外様大名ら22人に起請文を提出させ（中村1980, 下 pp.662-6）、翌年には將軍秀忠の名で同様の誓約を東北および関東甲信越の諸大名61人から取りつけたことで（同, 下 pp.681-7）、西国を従えた家康と東国を従えた秀忠による全国政権としての徳川幕府がここに成立するとともに、依然摂河泉65万石を領して大坂城に君臨する秀頼らを追い詰めてゆく態勢を整えた。そして14年、いわゆる方広寺大仏殿の鐘銘事件をきっかけに大坂の陣が起こり、豊臣氏は滅亡する。

してみると、名古屋城の作事がもたつた背景には上記の豊臣氏に対する工作の本格化があり、また関ヶ原前後の岡崎城にみるちぐはぐな修築過程も、東海道上に展開した天下普請の経緯から豊臣氏との衝突を想定したものと理解できる。そして江戸城に至っては、本格的な建設が1606年に始まる⁽¹²⁾、つまり將軍職を譲った秀忠のための城というべきで、家康自身のために建てた城は残る浜松か駿府にこれを求めることになる。

2. 駿府と浜松の地政学：信長の「異見」と「睨む」家康

1570年に家康が築いた浜松城は今川の家臣飯尾氏の引間城を「古城」としてその西に本丸と二丸を増設した城であり、家康の江戸転封後、豊臣の家臣堀尾吉晴が城主となって石垣や瓦葺きの建物を整備し天守を建てたというから（浜松市博2020）、いまわれわれがみる浜松城の天守閣は家康とは関係がない。関ヶ原のあと譜代の浜松藩主が三丸と侍屋敷を拡張して広域の近世城郭を形成した。近世東海道は海岸から北進して城の大手門に突き当たり、東に折れて引間宿を通り天竜川下流の氾濫域を横切って見付（磐田）に至る。

ところが家康ははじめ浜松に城をつくるつもりはなかったらしい。

此六月、從見付濱松江家康公移給。先古飯尾豊前か古城に在城、本城有普請、惣廻石垣、其上

何も長屋被立。見付普請被相止也、是信長依異見給如此。遠三之輩、何も在濱松す。九月十二日、本城江家康公令移給。（『当代記』巻1・元龜元年条）

此の六月、見付より浜松へ家康公移り給ふ。先古飯尾豊前が古城に在城し、本城普請有り、惣廻りの石垣、其の上何（いづ）こも長屋立てらる。見付の普請相止めらるるや、是れ信長の異見に依りて此くの如くし給ふ。遠三の輩、何れも在浜松す。九月十二日、本城へ家康公移らせ給ふ。

1570年6月（『徳川実紀』は正月）、家康は浜松に移って引間「古城」に滞在しながら「本城」浜松城の普請を進めた。「惣廻石垣」の上に長屋を建て並べ、遠州・三河の家来はみな浜松に来ていたというから、家康築城当初より石垣があったことになるが、それは

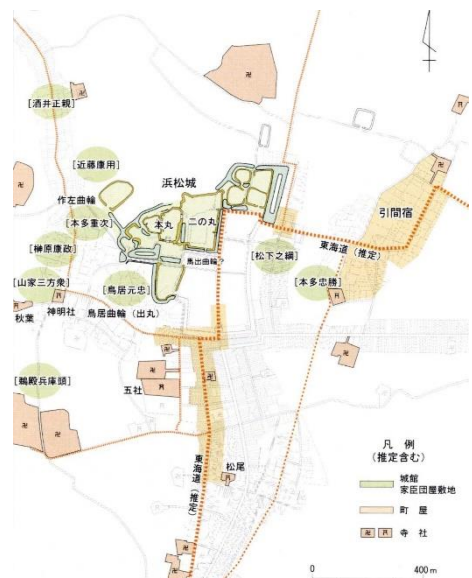


図5 浜松城（1580頃；浜松市博2020）

(12) 1590年の入城当初は御殿の雨漏りを放置していた家康も徐々に本丸と西丸の工事を進めていたが、92年からの朝鮮出兵や94年の伏見城普請役で中断を余儀なくされたという（村井2008, pp.56-60）。

さておき、見付城普請が信長の「異見」により中止されたという。この異見とはなにか。

見付は現在の磐田市、古代の遠江国府や中世の守護所が置かれた遠州の中心地で、家康は 1569 年「秋より翌春中まで」見付城普請に取り組んだ（『当代記』巻 1）。この見付城は現在の城之崎城跡とされ（磐田市 1995）、その築城の中止については一般に「東から武田氏に攻められた場合に、背後に天竜川があり、戦略上の問題を抱えている」からといわれるが（浜松市博 2020,p.1）、当時家康と武田信玄とのあいだには、大井川を境にして駿河を信玄、遠州を家康が取るという密約があったとされ、これに則して 68 年末に信玄は駿府を陥れ、そこから今川氏真が逃げ込んだ懸川（掛川）城を家康が攻略した。氏真は家康と和議を結んで翌年 5 月に開城し沼津へ去った。いわゆる今川氏の滅亡であるが、家康が見付城普請に着手するのはその年の秋であり、前年 12 月には武田の別働隊が北遠から南下して見付を攻略する（つまり信玄は先の密約を違えて駿府と見付の同時攻撃を仕掛け、家康の抗議を受けた）という一幕もあって（本多 2010,pp.62-74）、見付に城を築く家康の判断に「戦略上の問題」はないと考えられる。信玄は 69 年 12 月に再び駿河へ侵攻し、翌年 2 月には同国の中・西部を掌握した（同 pp.75-7）。家康が見付城普請を中止したのはちょうどその頃にあたる。

一方、織田信長は「天下布武」への道を進んでいた。信長の野心は 1565 年の將軍足利義輝殺害を契機とした花押「麒麟」の使用に始まり（佐藤 1988, pp.192-7）、67 年 8 月に斉藤氏の美濃井之口城を落として「岐阜城」と改名し⁽¹³⁾、同 11 月頃より「天下布武」の朱印を使い始めた。そして 68 年 7 月には信玄と和議を結んで、自らは 9 月に足利義昭をかついで入京し、信玄と家康は 12 月にそれぞれ駿河と遠州へ侵攻した。ところが今川と同盟関係にあった北条氏がいまの薩埵峠まで出てきて信玄を駿府に押し込める形勢になると、信玄は上杉謙信が雪解けとともに自らの背後を襲うのを恐れて「甲越和与」を信長に働きかけ、69 年 2 月に將軍義昭の御内書を引き出して 4 月に駿河から撤退した。その頃、信長は義昭の二条城をわずか 70 日で竣工し⁽¹⁴⁾、新將軍の政権基盤を整える一方、翌 70 年正月には「天下の儀」を信長に委任し、義昭の御内書に自らの書状を必ず添えることなどの「条々」を承認させると同時に、畿内周辺および東は甲州、西は備前・因幡、北は能登・越中におよぶ諸大名 21 人に自らの上洛にあわせて上京すべき旨を通達する（山本ら 2016,30・31）。こうして信長は 4 月に越前一乗谷の朝倉義景を叩くべく出陣したが、浅井長政の裏切りにあって京に撤退し（いわゆる金ヶ崎の退き口）、6 月 19 日に再度岐阜から近江に向けて出馬し、28 日の姉川の戦いで家康らの活躍により勝利する。

家康が浜松に移ったのはこの姉川の戦いに至る最中の 6 月で、信長の「異見」は見付城普請を止めた「春中」、おそらく信長の要請に応じて 2 月に上洛した際、信長から直接聞いたと考えるのが自然であろう。その内容は見付から浜松（引間）への築城地変更に違いないが、信長の真意を推し測るに、信玄の遠州侵攻を前提として「背水の陣になる」とか「天竜川が邪魔になって救援に向かうことができない」と言ったというのは⁽¹⁵⁾、少々家康を軽んじた物言い、家康が承服するとは思えない。

(13) 岐山の文王と曲阜の孔子という二人の聖地にちなむ。なお「麒麟」もまた聖人の治世に現れる。

(14) その工事現場でルイス・フロイスと面談した信長の姿が印象的である（松田 1978,pp.152-5）。

(15) 磯田道史「浜松の発展は信長の命令から始まる」：<https://suac.repo.nii.ac.jp/records/1159>。

事実、1572 年 10 月に信玄は遠州に侵攻するが⁽¹⁶⁾、その風聞がたった 9 月頃、信長は信玄に使者を出して「無事有るべきの由」を度々告げたという（『当代記』巻 1）。この無事はいわゆる**惣無事**の無事で、信長と信玄の同盟関係のもとに軍事権の行使を抑止するものと解されるが、ともあれ信長からすれば信玄と家康は戦うべきではなかった⁽¹⁷⁾。

しかし信玄はこれを無視して遠州に攻め入り、「高天神表を通り、見付国府え打ち出でらる。見付には浜松より人数置かると雖も無勢の間引き退く」といい、その際「信甲の衆、見付の古城の普請の体を見て夥しき（立派な）こと」と賛嘆したという（同上）。ここでわれわれは家康の初志にしたがって見付に城を構えていたらどうなっていたかを考えずにはいられない。信玄はその後天竜川沿いに北上し、信州から三河の長篠城などを攻略した別働隊と合流して二俣城に押し寄せるが、この「二俣の城取巻き」の注進を 11 月下旬に受けた信長は、直ちに援軍を出す一方（『信長公記』巻 5）、上杉謙信にあてて書簡を送り、信玄の所行を「侍の義理」を知らぬ「前代未聞の無道」として未来永劫の義絶を宣言する（山本ら 2016, 64）。どうやら信長は信玄の侵攻を知らなかったようで⁽¹⁸⁾、その怒りようからみても、かつて家康に示した「異見」が信玄の侵攻を想定したものとは考えがたい。

仮にこの時、家康が見付に陣取っていれば、後に信玄の子勝頼と戦う高天神城の攻防のように（1574-80 年）、大井川と天竜川のあいだでの合戦になっていたと考えられ、少なくとも浜松から天竜川ごしに見付を素通りする信玄を見送る事態にはならなかっただろう。江戸時代の浜松城は大手門を海に向けて開く南面の城郭であったが、それ以前は「引間宿から西へ向かう街道からの景観を意識して築かれた東向きの城郭」であったとされ（浜松市 2022, p.6）、家康の築城当初もそうであったとすると、天竜川ごしとはいえ信玄は家康の目の前を通ったわけで、浜松でも信玄の侵攻には無益であったことを物語る。

もともと信玄は見付から直進して浜松を攻略するつもりであったが（本多 2010, p.83）、実際には見付で北に折れて二俣城へ向かい、そこを落城させてから三方ヶ原に南下し家康をおびき出した。家康は「我が屋敷の背戸をふみきりて通らん、内に在りながら出でてとがめざる者やあらん」といい「陣は多勢無勢にはよるべからず。天道次第」という有名なセリフを吐いて出撃し敗れた（『三河物語』下）。1572 年 12 月 22 日、家康の人生最大の危機とされる「三方ヶ原の戦い」であり、その大敗北の屈辱にゆがむ表情を描いたものが

(16) 『三河物語』下によると、このとき天竜川を境に「川東は某が切捕る」と言ってきた信玄に対し、家康は強く反発している（小野 1965, p.332）。なお信玄の侵攻ルートについては本多 2022, pp.63-7。

(17) 信長は 10 月 22 日付の家康宛書状で遠州の見廻りに築田広正を派遣すると書いたあと「万端御分別専要に候ふ。畢竟御本意案の内に候ふ間、其の思慮尤もに候ふ」と述べている（奥野 1988, 344）。家康が何か深刻な相談をしてきたらしく「君の考えは私もわかっているから。そう思うのも無理はない」と慰めている。おそらく信玄の遠州侵攻の話で、信長は深刻に受け止めていなかったようである。

(18) この 11 月 20 日付の謙信宛書状で信長は「遠州表信玄備への体、一向不首尾の由に候ふ。駿遠間の通路は慥かに切り留め候ふ。然れども此方より出勢せしむるの条」云々といい、「信州へ道を作り往還すべきか」「畢竟敗軍すべく候ふ」と書いて、駿河から遠州に入る通路は遮断してあり、自分からも援軍を送ったから、信玄は二俣から山道を敗走するだろうと楽観している。家康もその前日付で義昭の御内書に対する礼状を出して「敵陣追々と相動くと雖も一円戦体に及ばず」といい、信長の援軍も来るから心配ないと報じた（徳川 1983, pp.49-54）。どうも家康は信長にも実情を伝えていなかったらしい。

「顰像」と信じられてきたわけだが、信玄がこのような大回りをして浜松を攻略したのは、やはりかれの病状が悪化していて、正面から攻めて籠城戦になるのを回避したのであろう（本多 2022, はじめに）。信玄は翌年、三河の野田城を攻略して甲府へ帰る途中に死ぬ。

このようにみえてくると、信長の「異見」とは単純に古代以来遠州の本拠地であった見付に家康が立派な城を築くことを嫌ったか、あるいは信長が岐阜から家康を成敗する場合を想定して、見付では「天竜川が邪魔になって」攻めがたいが、浜松なら家康が「背水の陣になる」と考えたのではないか。だとすると家康はしぶしぶ浜松に城を構えたことになる。

とはいえ、浜松に移ってからの家康は姉川・三方ヶ原・高天神城・長篠・小牧・長久手と合戦を重ねながら駿遠三に甲信を加えた五カ国の大名となり、天下人としての確かな基礎を築いた。その雄飛を慕ってか、浜松藩主は長く世襲されることなく、11 家の譜代大名が次々と入封しては幕閣に躍り出て、幕末までに 7 人もの老中を輩出した（小和田 1994, pp.26-7；浜松市博 2020, p.82）。唐津 20 万石から浜松 7 万石をへて「天保の改革」を推進した水野忠邦はその代表であり、浜松は確かに有為な人材が動く「出世城」であった。

駿府は古代の駿河国府を意味する地名で、ここに中世今川氏の居館が置かれ、**駿府城**が建てられた。家康がここで暮らしたのは 3 度：①今川の人質時代 1549-60、②五カ国大名時代 1586-90、③大御所時代 1607-16 で、家康没後 400 年にあたる 2016 年から駿府城天守台跡の発掘調査が 4 年間行われた結果、①今川館関連の遺構と②天正期・③慶長期の遺構が確認されたことは大きな成果であった（静岡市 2022, 第 2 章）。その間、天正期天守台の金箔瓦が見つかって「豊臣の城か」と騒がれたことは記憶に新しいが、天正期の駿府城が東向きであったと推定されることとあわせて

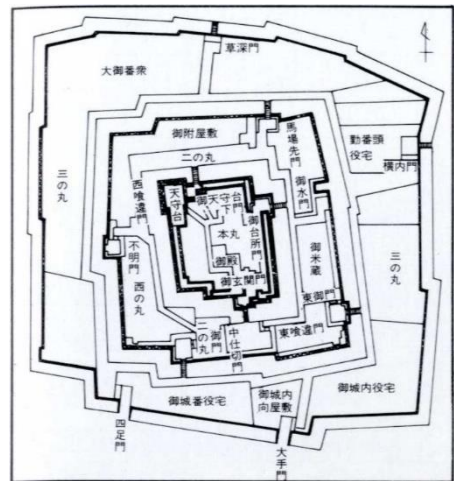


図 6 駿府城 (永原ら 1987)

(同Ⅲp.69)、当時秀吉に臣従していた家康が豊臣政権の「関東・奥羽惣無事」政策を最前線で担った事実が浮かび上がると同時に(本多2022, pp.161-7)、これを破却して「慶長期天守台の下に完全に埋められていた」ことは(静岡市2022, Ⅲp.62)、大御所となった家康の心中が察せられる貴重な発掘成果といえる。それはまた家康がその築城と町づくりの能力を遺憾なく発揮して作りあげた江戸城を将軍となった秀忠に惜しげもなく譲り渡した心情とも相通ずるかもしれない。

江戸城の天下普請が始まった 1606 年 3 月、家康は上洛の途次に駿府に立ち寄り、ここを終の住処と定めた。家康 65 歳であった。かれは増上寺の観智国師に駿府を選んだ理由を 5 つあげている：①幼い頃ここに住んでいたので「故郷の感」があり忘れがたい、幼時見聞きした人が成長した姿をみるのは愉快なものだ、②富士が北に高くそびえ、その左右に山脈が広がって冬あたたかく、老いを養うのによい、③「米穀の味、他国に冠絶せり」、④南西に大井川・安倍川、北東に箱根山・富士川があつて最も要害堅固である、⑤幕府に参勤する大小名が立ち寄りやすく道をそれずに会いに来られる立地であるうえ、地勢開けて景色もよく、富士を不死として南山の寿（長寿）を養うに足る（静岡市 1999, p.112）。静岡に住む人なら誰もが納得する理由のなかに稀代の政治家の目が光る。50km で 1000m も下る急流の安倍川左岸に広がる静岡平野は薩埵峠に向けて急激にすぼまり、天然の要害

を形成するとともに、江戸に参勤する「西国」の諸侯は必ず家康に挨拶に来ることになる。

駿府に居城を定めた家康は関ヶ原のあと城主となっていた譜代の内藤信成を近江長浜へ移し⁽¹⁹⁾、5 月には江戸城普請に動員された島津氏が石船 150 艘を江尻にまわして「薩摩土手」が着工される（本多 2010, pp.213-4）。この築堤により駿府の城下を分断して流れていた安倍川は藁科川と合流して西へ遠のき、そこから「駿府用水」を引きつつ、計画的な町割りの城下町が形成されてゆくが（若尾 1983）、その完成を見込んでか、10 月に家康は伏見から帰る途次にまた駿府に立ち寄り、天正期の城郭を捨てて南の河野辺に新築するという意向を示した（小和田 1992, pp.150-1）。これは安倍川を外堀、薩摩土手を土塁として新しい城を建てる計画であったようだが⁽²⁰⁾、結局この新築案は翌月に撤回され、天正期の城郭を拡張する形での着工が決まった。かくして天正期の本丸と二丸を中心に、三丸を拡張して同心円状に配した輪郭式の慶長期駿府城が誕生する（図 6）。

その改築工事は 1607 年正月に始まり、春の本丸普請では五畿内と丹波・備中・近江・伊勢・美濃の 10 ヲ国に「五百石夫」500 石に 1 人の人夫を動員した結果、7 月に本丸の建物が完成し、家康はここに移った。秋の二丸普請では 25 の西国大名を内々に動員し、10 月には作業を終えたが、12 月に家康が江戸から駿府に戻った直後、火の不始末により本丸と天守が全焼したため年明け早々再建に着手し、3 月に本丸、8 月には天守の上棟式にこぎ着けた。その天守は 1635 年に焼けて再建されなかったが、5 層 7 階の屋根に黄金の鯨を戴き、軒瓦にちりばめた金銀銅が天空に輝く楼閣であった（本多 2010, pp.215-21）。

いまま駿府城の石垣には天下普請に動員された諸大名の家紋・旗印や記号が刻まれた石があり、その刻印を集めて地図に落とすと西日本のほぼ全域にわたる⁽²¹⁾。天下普請は西国の外様大名が豊臣をかついで名古屋・駿府・江戸を攻めてくるということを想定して守りを固めた事業であるが、その石垣を西国の大名本人に積ませるところに家康という政治家の性質が窺われる。結局その備えは杞憂に終わるが、かれは決して油断しなかった。

家康は豊臣氏が滅亡した翌年に死の床に伏し、その遺言に遺体を久能山に納めることと一周忌のあと日光に霊を移して祭ることを指示した。この遺言を本多正純と天海とともに聞いた以心崇伝は家康の死を「元和貳年丙辰卯月十七日巳刻、大相国（太政大臣）従一位源家康御他界也。御年七十五」とだけ記し

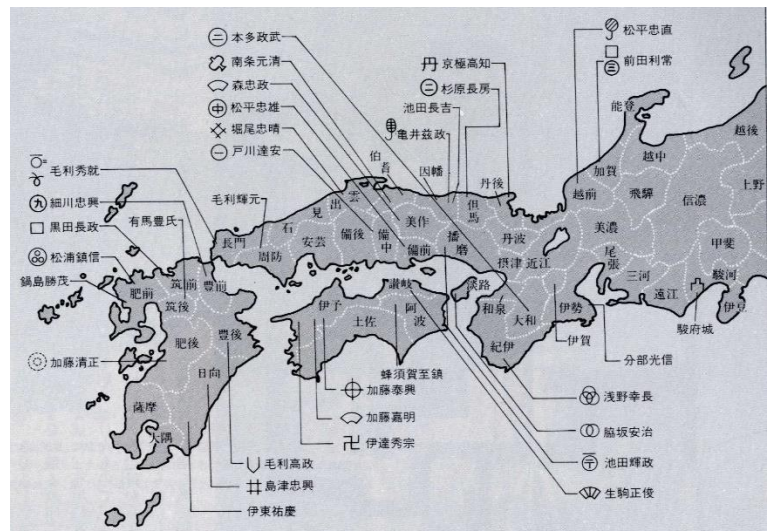


図 7 駿府築城の大名と刻印 (永原ら 1987)

(19) すでに関ヶ原の戦功により徳川四天王の井伊直政を彦根（佐和山）、本多忠勝を伊勢桑名に配し、後に家康の娘亀姫の子松平忠明を伊勢亀山を置いて（1610年）、「大坂包囲網」を形成する（図4）。

(20) 永原ら 1987,p.133 参照。あるいは豊臣時代の城から離れたいとの思いもあったかもしれない。

(21) 永原ら 1987,p.130 (図 7)。なお刻印は今回の調査でも見つかっている (静岡市 2022,Ipp.87-90)。

つづけて「同十七日之晩時際ニ久能へ奉渡之」「同十九日亥刻、御廟ニ納。神竜院（梵舜）沙汰之」と伝える（『本光国師日記』元和2年4月17・19日条）。その廟は当初7×4間の仮殿だったが翌年に3間四方の木造檜皮葺となり、家光による寛永度の普請（1640-41年）で社殿を銅瓦に葺き替えた際、この廟に「石之御宝塔」を建立して現在に至る（静岡市2016, p.87,92）。そしてその廟は「家康公の御遺命により西向きに」建てられた⁽²²⁾。その遺命の根拠は未詳だが、家康遺愛の指料で久能山第一の神宝とされる重文「三池の太刀」は「家康臨終の際、未だ幕府に対し不穏な動向のある西国に切先を向けて置くよう遺言した」との社伝があり、「御神体御同意」に尊崇され、「子孫長久の守神」とされてきたという（同 p.303；久能山2019, p.140）。この太刀の社伝から家康廟が西向きである意味も推察されるだろう。家康は死してなお西国を睨みつづけ、かつ自らの子孫が引き継いでゆく幕府を守ろうとしたのである。

一周忌のあと日光に小さな堂を建てて勸請せよと言った「八州の鎮守に成らせらるべし（関八州の守神になる）との御意」も同様の意味で、日光は江戸城のほぼ真北に位置するから自身を北極星「北辰」に擬えたものか、いずれにせよ守神になるおつもりと周囲は受け止めた。そしてその顔は不穏な動きに切先を向ける「忿怒」の形相であったと思われる。

「顰像」は「忿怒の表情」を浮かべた軍神的性格の礼拝像とされるが（松島2011, p.81）、しかみとはシワが寄ることで（『岩波古語辞典』）、能の「顰面」は鬼神の忿怒を表した：「眉根にしわのある開キ口の異相面。シカミジワで牙があり、頬の肉が盛り上がっている。」また「あから顔で、帚眉、三白目。舌はない。ザンバラ髭。凶悪で人に危害を与える面相。悪鬼に用いる」（横道1987, p.225；図8-1 横道1992）。この説明だと眉と髭と口が「顰像」の描き方に合わないが、もとより「顰像」は悪鬼の絵ではない。あるいは上の歯列を見せる片歯のベシミ口で八字髭・平ラ眉とすると、小ベシミの鬼神の風貌にもみえる（同上）。

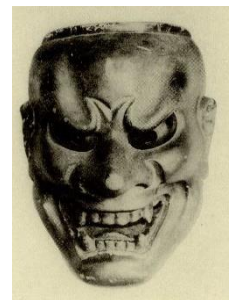


図 8-1 顰面



図 8-2 顰像(拡大)

ともあれ「顰像」の内箱の題「東照宮御影」を信じるとして、それが家康のどんな側面 profile を描いたものかと考えると、この絵は関東の鎮守・西国を睨む軍神として忿怒の表情を浮かべる家康を描いた可能性が高いだろう。家康の死からわずか5日後の4月22日、将軍秀忠は尾張藩主義直と駿河藩主頼宣・水戸藩主頼房とともに久能山の家康廟を参拝した（静岡市2016, p.87）。頼宣は家康の生前1609年にわずか8歳で駿河藩主となり、兄の義直や弟の頼房とともに駿府の家康のもとで暮らしていたが、この参拝の3年後に和歌山へ移り、紀州徳川家の初代となる。この頼宣が久能山の神廟で見た「睨む」家康のイメージが図像化されて紀州家に伝えられ、嫁入り道具として尾張徳川家に渡った末に「三方ヶ原戦役画像」となって尾ひれがついた。これは単なる想像に過ぎないが、「顰像」の異様な絵面は、生きた家康を知る者からしか出てこないのではないと思われる。

(22) 久能山東照宮ホームページ：<https://www.toshogu.or.jp/worship/precincts.php> による。

参考文献

・史料：

中村孝也『新訂 徳川家康文書の研究』日本学術振興会 1980 年（上巻・下巻之一）
徳川義宣『新修 徳川家康文書の研究』徳川黎明会 1983 年
竹内理三編『家忠日記』増補続史料大成 19 臨川書店 1981 年
副島種経校訂『新訂 本光国師日記』続群書類従完成会（第 3・4 巻 1968・1970 年）
『徳川実紀』第一篇「新訂増補 国史大系」吉川弘文館 1990 年（復刻版）
『史籍雑纂 当代記 駿府記』続群書類従完成会 1995 年（復刻版）
小野信二校注『家康史料集』人物往来社 1965 年（『三河物語』『慶長記』収録）
山本博文・堀新・曾根勇二編『織田信長の古文書』柏書房 2016 年
奥野高広『増訂 織田信長文書の研究』吉川弘文館 1988 年（上巻）
奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』角川文庫 1999 年
松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史 4』中央公論社 1978 年

・研究書ほか（50 音順）：「※」ダウンロード可能

磯田道史『天災から日本史を読みなおす』中公新書 2014 年
磐田市史編さん委員会編『図説 磐田市史』磐田市 1995 年
岡崎市『岡崎城 城と城主の歴史』2019 年
小和田哲男監修『図説・駿河・伊豆の城』郷土出版社 1992 年
小和田哲男監修『図説・遠江の城』郷土出版社 1994 年
笠原一男『一向一揆』評論社 1970 年
久能山東照宮博物館『久能山東照宮博物館 100 選』改訂版 2019 年
佐藤進一『花押を読む』平凡社選書 1988 年
静岡市編『久能山誌』2016 年
静岡市教育委員会編『大御所徳川家康の城と町 駿府城関連史料調査報告書』1999 年
静岡市教育委員会編『駿府城本丸・天守台跡』Ⅰ～Ⅲ（全 3 冊）2022 年
丹波篠山市『史跡篠山城跡整備基本計画』2019 年 ※
徳川美術館編『徳川美術館の名宝』1995 年
内藤昌『江戸と江戸城』講談社学術文庫 2013 年
永原慶二・海野福寿編『図説 静岡県の歴史』河出書房新社 1987 年
西村時彦『尾張敬公』名古屋開府三百年記念会 1910 年 ※
浜松市教育委員会編『浜松城跡 16』2022 年 ※
浜松市博物館編『図説 浜松の歴史』改訂版 2006 年
浜松市博物館編『浜松城 築城から現代へ』2020 年
浜松市文化財課編『二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書』浜松市教育委員会 2017 年 ※
原史彦「徳川家康三方ヶ原戦役画像の謎」『金鯢叢書』第 43 輯 2016 年 ※
本多隆成『定本 徳川家康』吉川弘文館 2010 年
本多隆成『徳川家康の決断』中公新書 2022 年
松島仁『徳川将軍権力と狩野派絵画』ブリュッケ 2011 年
村井益男『江戸城』講談社学術文庫 2008 年

盛本昌広『家康家臣の戦と日常 松平家忠日記をよむ』角川文庫 2022 年

山田秋衛『特別史蹟 名古屋城』名古屋城振興協会 1985 年 4 版

横道萬里雄編『岩波講座 能・狂言』Ⅳ・別巻 1987・92 年

若尾俊平「家康の町づくり」『駿府の城下町』静岡新聞社 1983